推理考証／夏目漱石『坊っちゃん』うらなり先生の 延岡転勤ルート

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学図書館 公開日: 2017-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊能, 秀明 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18670

推理考証／夏目漱石『坊っちゃん』 うらなり先生の延岡転勤ルート

伊能 秀明^{*}

1 はじめに

夏目漱石は、1867（慶応3）年2月9日（陰暦では正月5日）に生まれた。本名は金之助。金に困り泥棒にならないようにという迷信から、名前に「金」の字を付けられた。生後すぐ里子に出され、翌年塩原家の養子となったが養父母の不和から実家に引き取られ、小学校を3度転校した。1878（明治11）年5月頃、猿楽町の錦華学校へ転校した。かつて同校は、ホテル「ヴィラフォンテーヌ神保町」（現在の神田神保町1丁目）周辺に位置したが、1923（大正12）年の関東大震災のあと、帝都復興事業の区画整理で移転し、現在は千代田区立お茶の水小学校と改称され、明治大学中央図書館の隣接地にある。「吾輩は猫である 名前はまだ無い」と刻まれた文学碑が、同校敷地に建てられている。

漱石は、1916（大正5）年12月9日享年50で没した。だから2016年12月9日は没後100年目の命日となり、2017年2月9日は生誕150年の節目となる。

漱石は、日清戦争が終結した1895（明治28）年4月東京高等師範学校の英語嘱託を辞し、青春小説『坊っちゃん』の舞台となった愛媛県松山市

^{*}いよく・ひであき／明治大学 学術・社会連携部 図書館総務事務長

の愛媛県尋常中学校（松山中学）の嘱託教員に着任し、明治28年4月から29年4月まで1年間、松山中学に在職した。そこで小説の時代設定は、松山中学在職期間に近い日清戦争前後の時代、明治28年頃とされている。

漱石は、1906（明治39）年3月14日頃、突然『坊っちゃん』の構想を得たらしい。3月17日前後から書き始め、3月23日までに原稿用紙で109枚まで書いた（荒正人「漱石研究年表」参照。『漱石文学全集』別巻、1974年、集英社刊）。こうして『坊っちゃん』は、明治39年4月1日発行『ホトトギス』第9巻第7号の附録として発表された。

2 『坊っちゃん』における延岡をめぐる不可解な表現

漱石は、『坊っちゃん』で「うらなり」の転勤地に設定した延岡について、下記のように表現した。まず坊っちゃんは、「うらなり」が転勤すると知り「どこへ行くんです」と転勤先を尋ねると、赤シャツは次のように応えた。

「日向の延岡で一土地が土地だから一級俸上って行く事になりました」（『漱石文学全集』第2巻、108頁、集英社）

この文脈で、宮崎県北部にある延岡は、愛媛県庁所在地の松山に比べて遠隔の地で生活条件もよくないので、手当が支給される^{へんび}辺鄙な片田舎として表現されている。

ちなみに延岡には、藩校の流れを汲む私立中学の^{りょうてんしゃ}亮天社があった。亮天社は、1875（明治8）年から1903（明治36）年まで旧延岡藩主の内藤^{まさたか}政舉によって経営され、当時は宮崎県内で唯一の私立中学だった。『延岡郷土史年代表』（延岡市文化連盟他共編）には「明治三二（一八九九）年四月^{ふるしろ}恒富村古城に宮崎県立延岡中学校を創立した。」とある。小説の時代設定は明治28年頃だが、延岡中学はその頃まだ開校前だった。だから、明治28年に「うらなり」を延岡中学に赴任させようとする^ととすると辻褄が合わなくなる。でも小説執筆時の明治39年なら、延岡中学は開校8年目で、「うらなり」は赴任できたことになる。

次に坊っちゃんは、うらなりの転勤先が延岡と知り下宿に「帰ってうんと考へ込んだ。」

「世間には随分気の知れない男がいる。家屋敷は勿論、勤める学校に不足

のない故郷がいやになったからと云って、知らぬ他国へ苦勞を求めに出る。
夫も花の都の電車が通ってる所なら、まだしもだが、日向の延岡とは何の
事だ。おれは船つきのいい此所へ来てさへ、一ヶ月立たないうちにもう帰
りたくなった。①延岡と云へば山の中も山の中も大変な山の中だ。赤シャ
ツの云ふ所によると②船から上がって、一日馬車へ乗って、宮崎へ行って、
宮崎から又一日車へ乗らなくっては着けないさうだ。名前を聞いてさへ、
開けた所とは思へない。猿と人とが半々に住んでる様な気がする。いかに
聖人のうらなり君だつて、好んで猿の相手になりたくもないだらうに、何
と云ふ物好きだ」（『漱石文学全集』第2巻、110頁、集英社）

実際の延岡は、宮崎県北部に位置し譜代大名内藤延岡藩7万石の城下町
で、九州山地を背後に五ヶ瀬川の清流が貫流し、日向灘に向かって東側だ
け開けた平地に市街地が広がっている。むろん「大変な山の中」ではない。
地形的・近代教育史的には県内有数の「開けた所」だったはずである。そ
こで、この文脈の風景的な矛盾・地理的な違和感を統合的に理解しようと、
4項で見ると新聞人や研究者から諸説が提示されてきた。

ところで、上に引用した表現の中で、延岡にかかわる謎めいた表現が2
つある。

第1の謎は、なぜ延岡は「うらなり」先生の転勤地とされ「大変な山の中」
なのか、という問題である（傍線部①参照）。

第2の謎は、「うらなり」の転勤先として延岡中学校が設定されたが、松
山から延岡までのルートの問題である（傍線部②参照）。

いったいなぜ、漱石は「うらなり」の左遷先に延岡を選び、転勤ルート
を前掲のように表現したのだろうか。本稿では、人の好い英語教師「うらなり」
こと、古賀先生の転勤先に設定された延岡をめぐる「謎めいた表現」を推
理考証し、謎を解明することにした。

3 なぜ延岡は「うらなり」の転勤地なのか

—延岡は「山の中」と可愛岳突破—

旧知の菅邦男宮崎大学名誉教授は、「夏目漱石『坊っちゃん』—延岡は何
故『うらなり』の転勤先なのか—」（『社会文学』第31号、2010年2月発行、

67～78頁)で、なぜ延岡は「うらなり」の転勤先に設定されたのかという論点について独自の見解を發表された。菅論文は、「延岡と云へば……大変な山の中だ」という不可解な表現や、「うらなり」の謎めいた転勤ルートに焦点をあてて先行研究を検証し、新説を提示したユニークな論稿である。菅名誉教授は、漱石が「うらなり」の転勤先を延岡に設定した理由は西南戦争と関係すると言う。西南戦争は鹿児島島の城山で終結したが、実質的には延岡の和田越^{わだごえ}の戦いで薩軍が消滅し、終焉^{しゆうえん}を迎えた。ゆえに延岡は、薩軍が敗北消滅した地であり、西郷ら薩軍残党が可愛岳^{えのたけ}を登って政府軍の嚴重な包圍網を突破した地として知られることになった。

漱石が松山に赴任したのは明治28年で、翌29年に熊本の第五高等学校に赴任した。熊本時代は、西南戦争の話題に触れる機会も少なくなかっただろう。当然、隣県宮崎での戦闘、とくに延岡での和田越えの戦いや西郷らの可愛岳突破にも知識を得たはずである。菅名誉教授は、延岡が「山の中も山の中も大変な山の中だ」と表現された理由は、西郷の可愛岳突破が世間に広く知られていたからだろう、と推測された。

菅名誉教授は、漱石が朝日新聞主筆の池辺三山(吉太郎、元治元・1864～明治45・1912年)に会い「西郷隆盛」を連想した逸話も紹介された。1907(明治40)年3月15日、漱石は池辺三山の訪問を受け、これを契機に朝日新聞社へ入社を決意した。

菅名誉教授は、漱石が池辺に寄せた好感と信頼は、同時に「西郷隆盛」への好感と信頼でもあったことは推測に難くない、とされた。

なぜ漱石は、『坊っちゃん』に延岡を登場させたのか。

菅名誉教授は、西郷隆盛が和田越の決戦後、可愛岳の突破から鹿児島島の城山へ敗走した西南戦争が深くかかわっている。漱石の西郷隆盛に寄せる深く強い思いが、「延岡」に重なり合ったからである、と判断された。

延岡はまた、漱石の敬愛した西郷隆盛が最後の決戦を試みた地でもあった。菅名誉教授は、漱石が「うらなり」の転勤先を延岡に設定した理由について「西郷が陸軍大将の軍服を焼き捨て、解軍宣言を出し、西郷軍が壊滅した延岡こそ、『聖人うらなり君』の落ち行く先(引用者注・転勤先)としてふさわしい所だったのである。」(菅論文78頁)と結論された。

4 松山からの航路・下船上陸地と延岡への経路

「船から上がって、一日馬車へ乗って、宮崎へ行って、宮崎から又一日車へ乗らなくては着けない」というが、どこで船から上がれば、この文に適合する土地に着けるのか。

そこで、「うらなり」の転勤経路をめぐる主な先行説を検証してゆきたい。

(1) 郷土史家 石川恒太郎氏の「土々呂上陸、県庁で辞令受取り」説

郷土史家の石川恒太郎氏は『延岡の二城』（1935年発行）所収の「県北交通物語り」で、明治時代の宮崎県は幌馬車がほぼ唯一の交通機関だったと述べるとともに、「スピードからいふならばガタ馬車は全くお話にならないほど悠長なもので延岡から宮崎に行くには一日を要したのである、そのことについて夏目漱石の『坊ちゃん』はうらなり先生が延岡中学校に転任するといふ時に次のやうにいってゐる。（中略。引用者注・ここに「船から上がって」以下の引用文がある。）船から上って宮崎へ行くのは辞令を受取りに行くのだらうが、土々呂から上陸すればいくら幌馬車だって一時間あれば延岡に着く。」と指摘された。

石川氏は、延岡～宮崎間は馬車で1日を要し、宮崎へは県庁に辞令交付を受けに行くのだらうと推測された。菅名誉教授は、1891（明治24）年12月12日「勅令第二百四十四号 公立中学校専門学校技芸学校職員名称待遇及任免」にある公立中学校職員の任命権は府県知事が専行するという条項を引用し、県知事が任命権者なら辞令を受取るために県南の宮崎まで行く理由に説明がつく、と石川説を追認された。

(2) 夕刊デイリー新聞社 編集局長佐藤隆一氏の「九州相良」説

夕刊デイリー新聞社の佐藤隆一氏は、次のように言った。「漱石の作品を読んでいると、同じ年に書いた『二百十日』に、『そら、落ち行く先は九州相良^{きがら}って云うじゃないか』という会話が出てきた。（中略）都落ちの行く先は九州相良…それは漱石の頭に焼き付いていたのではないか。『うらなり先生の落ち行く先は……』『延岡』でなく『九州相良』とすれば、すべて説明がつき、合点がいく。」（1995年11月初出、『文学に描かれた宮崎 県北

を中心に一幕末・明治から戦中まで一』26～27頁、2001年、鉾脈社刊)

佐藤氏は、下船地は土々呂(延岡市)と推定し、ルートも相良(熊本県人吉市を中心とする球磨地方)がピッタリで、景観的にも山林が多く小説の文脈に調和すると言う。漱石が「うらなり」の転勤先を「延岡」と明記しながら、相良を暗示した理由は「漱石特有のユーモアと優しさ」に起因する、と推定された。

(3) 平岡敏夫筑波大学名誉教授の「飢肥(日南市)」説

平岡名誉教授は、『坊っちゃん』に描かれた延岡は、実は^{おび}飢肥(日南市)なのではないかと想定した。「かねて私はこの『延岡』に鷗外『安井夫人』(大三)に描かれている日向の飢肥、すなわち幕末の大儒安井息軒^{たいしゅうやすいそけん}の仕えた飢肥藩の城下町を何となく重ねてイメージしていた。現在、日南市となっているが、この地こそは当時としては宮崎から一日車に乗る山の中といったところだっただろう。」(平岡敏夫『漱石 ある佐幕派子女の物語』82～83頁、2000年、おうふう刊)

『安井夫人』は、森鷗外が儒学者安井息軒(寛政11・1799～明治9・1876)と賢夫人佐代を描いた歴史小説である。平岡名誉教授は、転勤先は延岡ではなく、県南の城下町の飢肥(日南市)のことではないか。ルートは、延岡で下船して、馬車で一日宮崎へ行き、宮崎から山あいへ俵(人力車)で1日行くとすれば、飢肥までのルートを想定したものと認められる、と指摘された。

(4) 菅邦男宮崎大学名誉教授の「細島港乗り継ぎ、油津港上陸」説

菅名誉教授は、1895(明治28)年頃に大阪から宮崎を経由し鹿児島まで運航された航路を調査し、『大阪商船株式会社五十年史』(1934年6月発行)を参照して、松山から宮崎沿岸へは、大阪～細島線、大阪～鹿児島線という2つの航路があることを見出された。

小説では、「船から上がって、一日馬車へ乗って、宮崎へ行って、宮崎から又一日車へ乗らなくては着けない」とある。

菅名誉教授は、小説は漱石の松山中学在職時代の明治28年頃を舞台にしたと考え、当時の汽船航路から次の転勤ルートを推測された。

「うらなり」が宮崎を経て延岡に赴任するには、三津浜港から大阪～細島線に乗船し細島港（日向市）へ行く。細島港で大阪～鹿児島線に乗り継ぎ、油津港（日南市）で下船する。油津港から馬車で宮崎へ行く。県庁で辞令を受け取り、馬車で1日かけて延岡まで北上する。

このような菅説は、小説設定年代の明治28年頃における汽船運航状況に基づく見解である。

しかし、延岡の地方史を振り返ると、明治28年には延岡中学は開校前で、学校が無ければ「うらなり」の転勤も無理といわざるを得ない。

(5) 私見「内海港で下船上陸」説

明治36年10月、大阪～細島線の航路が、細島港（日向市）から内海港^{うちうみ}（宮崎市）まで延長された。

私見では、執筆時期の明治39年を基準とし、「うらなり」は三津浜港で乗船し、内海港で「船から上がって、一日馬車へ乗って、宮崎へ行って」県庁で辞令を受け、「宮崎から又一日車へ乗らなくては着けない」とあるように、1日馬車に乗り延岡へ着く経路を想定した。

小説では「うらなり」が転勤する前に話が終わるが、「赤シャツの云ふ所」に従い「うらなり」を延岡へ転勤させると仮定した場合、この道順こそ最も合理的なルートだと考えた。

本稿では、菅論文の細島港乗り継ぎ油津港上陸説に触発されて、先行説の検証を試みた。

紙幅の制約から詳細は割愛したが、「うらなり」転勤経路について推理し私見を提示した。

そもそも「うらなり」転勤ルートの考証は、虚構の考証に過ぎない。

しかし虚実が皮膜の間に込められた『坊っちゃん』の読解深化に資する点があれば、望外の幸せである。

(注) うらなりの転勤先ルートに関する諸説

氏名	石川恒太郎説	佐藤隆一説	平岡敏夫説	菅邦男説	私見
発表年月	1935年2月	1995年11月	2000年1月	2010年2月	2017年3月
乗船地とルート	松山港～土々呂港～宮崎～延岡	松山港～土々呂港～宮崎～相良	松山港～延岡近郊の港～宮崎～飫肥	三津浜港～細島港乗換～油津港～宮崎～延岡	三津浜港～内海港～宮崎～延岡
航路	—	—	—	大阪～細島線 大阪～鹿児島線	大阪～内海線
乗船港	松山港	松山港	松山港	三津浜港	三津浜港
下船港(所在地)	土々呂港(延岡市)	土々呂港(延岡市)	延岡近郊の港	細島港乗換～油津港(日南市)	内海港(宮崎市)
下船後の交通	幌馬車	馬車	宮崎まで馬車、宮崎から人力車	馬車	馬車
宮崎～転勤地直線距離	78キロ	70キロ	32キロ	78キロ	78キロ
転勤地	延岡	熊本県人吉市周辺(九州相良)	飫肥(日南市)	延岡	延岡
旧制中学	延岡中学	なし	なし	延岡中学	延岡中学